（生玉）門を明けたは誰そ、だんないものと由兵衛上り口までつかつかと（今宮）。

「だいじない」（大事無）の訛。差支ない。現今も關西地方で普通に用ゐられ、「だあない」ともいふ。增補俚言集覽に、「だんないは大阪詞、大事ないことなり、改て云へば大事おませんともいふ」。

＊たんのう 関部と縁を切りて下されたれば、心にたんのうなさる程のことは何卒致さう（一心二河白道）

二人一所に居る上はたんのうではあるまいか（淀鯉）

「たんぬ」（足）が轉じて「足んの」となり、「たんのう」と延びた轉成名詞である。（堪能と書くは當字）。滿足、十分。井原西鶴『日本永代藏』卷四、仕合の種を蒔錢の條に、「あまたの講まゐりはあれども、終にこの乞食のたんのする程錢とらせし人なかりき」。

たんばいろ びつくりびつくり唇うるみたんば色、瘧病のやうにわななき聲（千疋犬）

（膽礬色）顏色が膽礬のやうに蒼くなつたこと。

だんはう いやそれまでもなし、即ち我等が檀方なり（融大臣）

（檀方）檀家の方の義。一寺院に隸屬して信施を投じる俗家。

＊たんばこえ これぞほんの丹波越

と不道化言うて忍び出ろ、氣の愚かさも育ちから憂き事知らぬしるしかや（淀鯉）

（丹波越）もと京都島原の言葉で、亡命する者多くは丹波越をするによつていひだした言葉であるが、遂に廣く亡命の意にいふ語となつた。いたし船（延寶七年刊）西鶴の句に、「弓張の月の行方丹波越」。都風俗鑑（延寶九年刊）三卷に、「女の身として苾居先をするとて大きなるはまりにあひて、わが物は是非なし人の物までおひちらし、女の丹波越いと珍らかなり」。

だんびら ここ見事なだんびら脇、此足にて逃げたらば天竺までも一飛ならん（津戸三郎）　大切先のだんびらもの、身ばかり買うていなれたは後家鞘に極つた（女腹切）　宇多の國行二尺ばかりのだんびら物（鬻門松）

「だだびろ」（徒廣）の轉訛である。「だんびら鬻」とは平たく廣い鬻。「だんびら物」とは幅廣い刀。武家名目抄・刀劍部・十七に、「たひらは卽ほたひらのはを略したるにて、刄の幅の廣きをたひらひろといひ、狹きをたひらせまといふ。後代だんびら物といふことあるは、たひらひろの略語なり」。

たんふ 「たんふく」を見よ。

だんぶくろ 天の戸袋だんぶくろ、くわつと開けた初日の色（雪女）

「だにぶくろ」（駄荷袋）の音便。布製の大きな袋。

たんぽ 集禮も書付あるならば代物遣らんと言ひければ、心得たんぽをつけ生薑・鹽貝に花鰹、書出いたし算盤に暫く時こそ移りけれ（氷朔日）

「湯婆」の唐音である。大阪詞に銚釐をいひ、酒を温める器。俚言集覽に、「たんぽ。大阪詞、酒のちろり也」。氷朔日のこの文は「心得た」に「たんぽ」をいひかけたのである。

＊だんまつま 斷末魔の四苦八苦（曾根崎）

（斷末魔）梵語 Marmacchid であらう。Marmacchid は Marman と chid との合字であつて、Marman は支節の義で、chid は切斷する義である。Marman を訛つて末魔と音寫し、chid の義の斷と合して斷末魔となつた語で、この世から氣息を引取る最期、卽ち生から死に移る悶絕の眞際をいふ語である。顯宗論に、「傷害人心者、臨終受二斷末魔苦一」。俱舍論・十に、「於二身中一有二異支節一、燭便致死、是謂二末魔一」。

だんりん 越後より下總の檀林へ通る所化の僧（最明寺殿）

（檀林）禪檀林の略。佛教の學問所を云ふ。寺院。

ち

ちいみ これでそもじを殺すかや、ちいみも今はいつはりと（大經師）

（血忌）大海書・寛永十一年刊）に、「血忌は人馬の血をとらず、針灸にいむ」。曆日講釋に、「物の命をとり針灸治等には至つて惡し」。ここの文は、大經師に緣ある曆上の語を用ゐて文を飾つた曆づくしの祭文である。

ちうげんぜんのかうたい 「ちゆうげんぜんのかうたい」を見よ。

ぢうごふ 撫づとも盡きぬ大石の、住刼の末西域の皇帝、民主王より八萬餘代（羅迦）

（住刼）四刼の中の第二の刼で、成劫より壞劫に至る間をいひ、世界の成立し住持される時間である。

ぢうそう 「じふさう」を見よ。

ちえだ・つねのり 我朝のゐかきにてちえだつねのりといひし人、忝くも勅命にて筆を染めしと承る（大掛物）

（千枝・常則）源氏物語の中に見える繪師である。源氏物語・須磨の卷に、「この頃の上手にすめる千枝常則など召して、作り繪仕うまつらせばやと心もとながりあへり」、とありて細流に、「千枝常則皆繪師也」と見えてゐる。

＊ちかごろ 近頃面目なけれども人人も聞いてたべ（二枚繪）

（近頃）近き頃の義。轉じて「まこと（誠）に」といふ程の意にいふ。

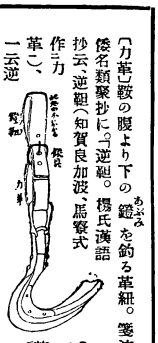
＊ちかひ 二人は赦され我一人誓の網にもれ果てし、菩薩の大慈大悲にも分隔てのありけるか（女護島）

直に成佛得脫の、誓の網島心中と（天網島）　肩に笈摺同行二人、誓の船に任せ行く（嵯峨天皇）

（誓）佛菩薩の四弘誓願、卽ち衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無盡誓願學、佛道無上誓願成をいふ。佛菩薩が苦海に沒在せる諸の衆生を救濟維致し給ふこの誓願を網に喩へて「誓の網」といひ、また生死の苦海を渡つて涅槃の彼岸に到らしめるを、船に喩へて「誓の船」といふ。謠曲・俊寛に、「非常も同じ大赦なるに、一人誓の網にもれて沈み果てなん事はいかに」。玉葉和歌集・卷十九、釋教歌の部に「世にこゆる誓の船を頼むかな、苦しき海に身は沈めども」。

ちからがは 切付・馬膚・力革・金の覆輪ふつつと切れ（加增曾我）

〔力革〕鞍の腹より下の鐙を釣る革紐。箋注倭名類聚抄に「逆鞦。楊氏漢語抄云、逆鞦(知賀良加波)馬奢式作二力革一云逆」



〔力革〕

靳、按、古有二鐙頭一無二舌、別有二鉸具施レ舌以レ革、接二續鐙頭一、以孚二鐙鞦孔(鬆)之者一、所謂力革或是、今俗謂二鐙鞦一爲二力革一者似レ誤(こふし)。

ちからがみ 門出を祝ふ力紙、拳を固め四つ辻に、四人さまよひ立ち居たり(堀川波鼓)

〔力紙〕力士が土俵に登る際、水を呑んで口を拭ふ紙を云ふ。ここの文は女敵討の場に臨む時であるによつて、その首途を祝していうた語である。

***ちからぐさ** 隔つる中の垣根草、力草なく泣き交す心ぞ思ひやられた

〔力草〕をひしば」ともいひ、路上などに自生する一年生草本で、莖の長さ一尺許に達し、強靭なるによつて力草と長く平行脈を有して互生し、夏季穂を出し、花は花莖の頂に複穂狀花序をなして數個集る。

〔力草〕

***ちぎ** 和光の塵の萱の屋根千木の片反ぎ(國性爺)

〔千木〕「ひぢき」(肱木)の略。上古の家づくりに、棟の端の材を棟の角から組合せて空へ出したものを云ひ、今は神社の屋根にのみ作る。

***ちぎやう** もとは知行も取つた筋(女腹切)

〔知行〕知り行ふ地の義。武家時代に武士のあてがはれた領地。封禄。

ちぎやう 不淨を隔つる忍辱の袈裟、知行劣らぬ御弟子達(蟬丸)

〔知行〕知識行力。知は智とも書く。法華玄義、四に「知目行足、到二清涼地一」。

***ちぎりぎ** 隣町隣家の旅籠屋ども棒ちぎり木にて馳付け(丹波與作)

いさかひ過ぎての棒ちぎり木、後の廣言腹の皮(烏帽子折)

兩端少し太く、中を少し細く削つた棒。山本信有編、孝經樓漫筆、卷四に、「棒ちぎり木。擬信有編、孝經樓漫筆、卷四に、「棒ちぎり木。擬を織る具にちぎりといふ物あり、兩端大きく中細き物なり、其樣なる棒なり、或說にちぎりぎは杖の事なり、杖は乳の通りにて切る故也といふ、非也」。安齋隨筆、卷十三に、「棒ちぎり木。棒といふは兩端も中も同じ太さに削るなり、ちぎり木も棒と同じ樣なれども、是は兩端を少し太く中をば少し細く削るなり、(或說に、ちぎり木といふは杖のことなり、杖は乳の通りにて切る故なりといへり、非なり、杖とちぎり木とは別なり)、如レ斯削れば人を打つ時しなひて中り强きなり云云」。

***ちくえふ** 虎が名に負ふ竹葉の、淺綠といふ柳樽、封を切らんと喜びける(加增曾我)

〔竹葉〕「たけのは」を見よ。ここの文に淺綠とあるは「淺綠をいふ柳樽」を見よ。

ちくご 其萬代も竹の名の筑後の後の末長き(用明天皇)　筑後の川中島の四段目(菅原申)

〔筑後〕竹本筑後掾をいふ。「たけもとちくごのじょう」を見よ。ここの文に「川中島の四段目」とあるはその掾を見よ。

ちくしやうざんがい 終に猫を食殺し、鼎は悅ぶ畜生ざんがい、散散にこそ逃げ失せけれ(大織冠)

〔畜生殘害〕「殘害」はそこなひやぶる義。鳥獸蟲魚が互にくひあふを畜生殘害といふ。徒然草、第百二十八段に、「犬かた生ける物を殺し、いためたたかはしめて遊び樂しまん人は畜生殘害の類なり」。

ちくぢやうげだう 佛の弟子神通の目連は竹杖外道に打殺され(用明天皇)

〔竹杖外道〕外道の行者であつて、佛法に反抗し、釋尊の十大弟子の一人なる目連を殺したこと、增一阿含經の中に見えてゐる。

***ちくてん** 日月の御旗を渡し、遠き韓國根の國へも逐電あれと(振袖始)

〔逐電〕出奔。かけおち。逐電はもと奔電を逐ふ義で、速力の急なるをいうた語である。揚子に、「九方馓之相二馬也、雖未二迹一風逐一電絕レ塵掣レ影、而迅速之勢已見矣」。王子淵が得臣の頌に、「追二奔電一逐二遺風一」。伏國でも古書に、急ぎ參內するを逐電と見えてゐる。逐電を逃亡の意にいふはその義を轉じたのである。

***ちぐのえん** 問ひ問はるるもちぐのえん、粗忽に申す事なられど(振袖始)

〔値遇之緣〕前世の宿緣によつて現世で逢ひ遇ふこと。「値」は說文に「遇也」とある。謠曲、鉢の木に、「げにこれも旅の宿、假初ながら値遇の緣、一樹の蔭のやどりも此世ならぬ契なり」。

ちくら 姿は唐人・身は日本、これやちくらが沖つ波(大織冠)　頭は日本・胴は韓との襟界、ちくらてくらの一夜檢校、終に目馴れぬ出立ちばえ(博多)　唐の姫君相住みを邊り隣りも浮名立て、唐と日本の汐境ちくら者かと疑へり(國性爺)

〔襟羅〕韓と日本との襟界を襟羅の澳と云ふ。按ずるに、韓と對馬との間にある亘濟島を昔は濟盧といつた。「ちくら」は濟盧の轉語であらう。襟羅は韓と日本との襟界にあるによつて、どちらともつかぬことにいふ。和訓栞に、「ちくら。物事のどちらへもつかぬに、ちくら樣ともちくら者ともいふは、對馬の海中にちくらが澳といふ所あり、潮の戶甚だ速し、韓國と日本のしほ堺也といへり、萬葉集に對島の渡わた中に幣とり向けてといへる是にや、よて心樞度なく事着落きをちくらが澳にただよふとはいへる成べし、隋書に襟羅島とも見ゆ云々」。「ちくら手暗」「ちくら者」とは、素性の何者とも知れぬ者の意。

ちくりん 舍衞國に鬼を驅つて竹林を建てしこそ、佛法止住の因緣なれ(賀古教信)

〔竹林〕天竺の羅訶陀國王舍城と上茅城との間に竹林があつて、迦蘭陀長者の所有であつたのを釋尊に寄附し、頻婆沙羅王が釋尊の爲にこの竹林に學舍を建立した。これを竹林精舍といひ、天竺五精舍の一である。

竹林の七賢 七人の樂人に胡飲酒醋醉樂など舞樂を奏し、竹林の七賢が樂しみを學んではいかがあらん(女護島)

西晉時代に常に竹林の下に集つて飲酒清談を事とした阮籍等七人の徒を云ふ。世說・任誕篇に、「陳留阮籍、譙國嵇康、河內山濤、沛國劉伶、陳留阮咸、河內向秀、琅邪王戎、七人常集二於竹林之下一、肆意酣暢、故世謂二竹林七賢一」。

***けん** 知見の目には上十五下十五夜と見つれども、衆生は心亂れ碁の石とや嘸な見るらん(國性爺)

諸神諸佛のけんの矢只今頭上に

落來るか（松風）

〔知見〕意識眼識の義。大悟して法相を知得した智力をいふ。法華經・方便品に、「如來知見廣大深遠」。

＊ぢこく 死出の山には馬となり多聞・持國に口取られ、佛土に參りおはしませ（孕常盤） 欲界の六欲天、大毘沙門天・持國天（天神記）

〔持國〕持國天の略。梵名をDhrtarastraといひ、左手は臂を伸べて垂れ刀を把り、右手は臂を屈めて前に向け掌中に寶珠を持つ。四天王（その條を見よ）の一で須彌東方の守護神で、佛國土を護持してゐる佛神である。

ぢごくおとし これぞこの世の地獄おとし、かかる鼠の如くなり（丹波與作）

〔地獄落〕鼠を捕へる具。一尺許の長方形の匣の上に木材で造つた重き落し蓋を設け絲で釣し、下に餌を置き、鼠が餌を食はうとして匣の中に入れば、釣はづれて蓋落ち壓殺する裝置にした物。

＊ぢざくら 切戸の文珠現じ給ひて兒櫻、これ佛神の御方便（賀古教信）

〔兒櫻〕山櫻の一種である。俳諧歳時記栞草に、「兒櫻。山櫻の一種なり、又小櫻の類にて別種なりと云、按るに山櫻の中に紅色を含みて美しく愛らしき花あり、故に兒櫻の稱ある歟」。松岡玄達撰・櫻品に「熊谷櫻よりは重薄し、熊谷は花鏡外へ反りて開く、兒櫻は内へ抱へあり、單の小輪白色にして花蹄らにつくものなり、洛西仁和寺二王門下東側に一株あり、花小くして能く李花に似たり」。

＊ぢごもんじゅ 兒文珠の御相傳大師の弘め置き給ひ、俗も尊む若衆のなさけ（萬年草）

〔兒文珠〕文殊菩薩が舍衛國の多羅聚落の梵德婆羅門の家に生れられた童形をいふ。巢林子のこの文は、弘法大師が兒文殊より始まつた若衆の情（なさけ）、衆道を相傳を受けてこれを弘めたといふ意。蓋し文殊の具名を文殊師利（Mañjusri）。妙吉祥又は妙德（とも訳す）といふにより、師利を尻に通はせ、兒尻を若衆の情（なさけ）の意にしたのである。師利を尻に通はせた例は、犬筑波にも「佛の前でせんずりをかく」といふ句に、「夜もすがらしたくぞ思ふ文珠尻」と見えてゐる。弘法大師が男色を弘めたといふも、蓋し女人禁制から男色が盛んに行はれたので、かくいひなした俗説に據つたのである。和事始に、「我朝にて男色を愛する事、空海法師渡唐以來の事也と云ひ傳ふれど、續日本紀に孝謙天皇の御時道祖王ひそかに侍童にかよへりとあれば、猶其前久しき事にや、或人の云く、破戒の比丘の此戲れは弘法以來の事成るべし」。

ちごわげ 力は八十餘人が力・頭は今に兒髷に、足には髭のむくつけき（虎が歴）

〔兒髷〕昔時公家武家の公達が元服以前に結んだ髷であつて、頭上高く兩輪を作る結髪である。後には少女の結ぶ髷となつた。

＊ぢざう お吉と見るより地獄の地藏、お吉樣下向か、わしや今斬らるる助けて下され（女殺） 袖印に地藏の梵字、此世にては勝軍、未來の案内迷ふな（三國志）

「地藏菩薩」の略。梵名をKsitigarbhaと云ふ。堪忍强くして動かないこと大地の如く、靜慮深沈なること祕藏のやうであるから地藏菩薩と云ひ、身を六道に現じて衆生を救濟される。「六地藏」を見よ。「地藏の梵字」は地藏菩薩の種子（ぼうじ）をいふ。「地獄の地藏」といへるは、俗説に賽の河原で小兒等石を積んで塔を造れば、鬼來つて之を崩す、小兒等は地藏菩薩の袖に隱れて雖を免れるといふに據つてかくいひ、「此世にては勝軍」といへるは勝軍地藏（延命地藏）の緣によつたのである。勝軍地藏の名は勝軍不動に對したもので、軍神として之を念じる。女殺油地獄に「若衆の病の稱には大慈大悲の地藏菩薩」とあるは、若衆は鷄姦よりして痔疾になる者が多いから、痔に地藏菩薩をいひかけてかくいうたのである。

ちじうやき ちじう燒の青磁の壺目の前近く差置いたり（唐船噺）

池州燒か。池州は支那安徽省貴池縣がその舊地で、この所から池州燒と稱して磁器を產出したこと明かでないから、或は「ちじうやき」は「ち（正しくは「じ」）しうやき」（磁州燒）の誤か。磁州燒は支那の河南磁州で燒いた磁器で、五雜組・第十二卷・物部に、「今俗語窯器謂之磁器者、蓋河南磁州窯最多、故相沿名之、如銀稱朱提、鑑稱陰燧之類也」と見えてゐる。

＊ちしき 今出家とはなりたれども、智識智者の身でもなし（卯月淵色）

到り先立つこの人人を、今身の上の智識ぞと、頼む外には菩提をも（氷朔日）

〔智識〕善智識の義。その條を見よ。

＊ちしご 苦しむ息も曉の、知死期につれて絶え果てたり（曾根崎） 時も時分も六六に、胸はわけなき五五八八、知死期近づく計りなり（宵庚申） あれ寺町の鐘の聲、一二九十は七七の、七つの知死期最後も早と來にけりし（氷朔日）

〔知死期〕俗説に人の死ぬる時刻は自ら定まつてゐるもので、概して潮汐の退く時刻に於て死ぬといふ。左に世に言傳へてゐる所を記す。されど月に大小あり、行度に遲速あるが故に精細には知り難い。

上旬 一二九十は九子九午六卯六酉 三四五 は五辰五戌八丑八未 六七八 は七寅七申四巳四亥

中旬 一二九十は五辰五戌八丑八未 三四五 は七寅七申四巳四亥 六七八 は九子九午六卯六酉

下旬 一二九十は七寅七申四巳四亥 三四五 は九子九午六卯六酉 六七八 は五辰五戌八丑八未

心中宵庚申のここの文に就いていへば、情死た決心したのは四月五日宵庚申の日で、知死期は五つ時（辰で今の午前八時頃）、五つ時（戌で今の午後八時頃）、八つ時（丑で今の午前二時頃）、八つ時（未で今の午後二時頃）の四つの時に當る。そしてお千代・半兵衛家出の時は暮六つ（今の午後六時頃）なれば、次の知死期は五つ（戌）であつて、死するに間もないとの意。但し情死したのは五日ではなくて、六日の夜明け時に巢林子は書いてゐる。

＊ぢしゅのさくら まづ王城の地主の櫻に（賀古教信）

落來る瀧の音羽の嵐に地主の櫻はちりぢり（女梅）

〔地主櫻〕地主權現の櫻をいふ。地主權現は京都清水寺鎭守の權現であつて寺内にその社がある。「落ちくる瀧の云云」をも見よ。

＊地水火風 このからだは地水火風、死ぬれば空に歸る（天網島）

四大といふ。佛法にては世界の萬象皆この四大の和合によつてなるといふ。四曼經に、「我今此身四大和合。「しだい」「ごりん」をも見よ。

＊ぢだんだふむ 吉祥女ぢだんだ踏み（釋迦如來誕生會） 梅龍つつ立ちぢ

だんだ踏み、ええええはやまつた仕損じた(大經師)

「ちたたらふむ」(地鞴踏)の訛。身をもがきながらせかせか足踏みするを云ふ。

ちちくわい　鶉とならんと詠じけん、古歌はちちくわい、我は又父戀しやと音をぞ鳴く(千疋犬)

鶉の鳴聲。和漢三才圖會卷四十二、鶉の條に「其聲如ニ曰ニ知地快一」。この文に就いては「夏草の茂りていとど云云」を見よ。

***ちつきん**　ちつきん外樣の大小名(百日曾我)

〔昵近〕親しみ近づき。なれしたしむこと。北齊書・安德王傳に、「殺ニ其昵近九人一」。

***ちつぺい**　守屋が是非を糺さんとは慮外千萬ちつぺいめ(聖德太子)

思ひも寄らぬちつぺいめに、あたら骨を折つたよな(國性爺後日)

小なる義。ちつぽい。人を罵る語で、小者またはこわつぱの意にいふ。この語現今も中國地方にて往往用ゐてゐる。善光寺御堂供養(淨瑠璃)に、「幼き者の袖が見ゆる、ムム聞えた善介といふちつぺいめがあると聞いた、さては爰へ來したな」。

***ちと**　往來の老若男女、劔蕘の者、雉兎の者、柴賣ろ賤も立とまり(天智天皇)

〔雉兎〕獵夫。孟子・梁惠王下篇に、「劔蕘者往焉、雉兎者往焉」。

***ちとくわん**　少くわん、觀ずれば夢の世や、寢て溫めしほところ子、いつの間にかは浮かれそめ(歌念佛)

〔少觀〕觀は勸進の略。勸進の爲に少しの喜捨を乞ふ意であつて、熊野比丘尼のいふ語。巢林子作・主馬判官盛久の法性覺道行の文中、熊野比丘尼の言葉に、「我我は熊野比丘尼、如何な閑所も徇兎の者、塵の葉は入りませぬか、ちとくわんくわんとぞ仰せける」。

地の物眞似　役者物眞似・地の物眞似、小唄・淨瑠璃・口てんがう(女郎)

淨瑠璃など謠ひ物の地の文句を名人の口吻に眞似て謠ふこと。

ちのを　乙はちのをといとほしく、あくがれ尋ね出で給ひ(十二段)

〔血緣〕血緣。ここの文は、末子は殊に血緣深いのでいとほしいとの意。

***ちはこのたま**

「千秋萬歲の千稙の玉」を見よ。

ぢふく　子の五人や十人は地幅さへよければ半年にも出來る事(冷泉節)

〔地幅〕東海道名所記(萬治元年刊)江戸をいへる條に「砂ほこりは立あがる、されども地幅のよき所と聞えたり」。とありて「地幅」は土質の義である。ここの文は、女の腹を子種を植付ける土質に見做して地幅と云うたのである。

***ぢぶつ**　持佛へ參つても佛の顏が見えなんだ(壽門松)　持佛堂に火を灯せ(堀川波鼓)

〔持佛〕持佛堂の略。朝夕信仰する佛像を安置せる佛間。

ちみどろちんがい　目鼻血みどろちんがいに(生玉)　顏に燒鐵入癧耳殺ぐ鼻殺ぐ、血みどろちんがい追ひ拂ふ(博多)

「血みどろ」は血綠即ち碧血の義、生血をいひ、「ちんがい」は血が滴即ち流血をいふ。自樂撰・地獄樂日記(寶暦五年刊)に、「かんづか摑んで緣の下へ投げ落せば、丁稚は額を打ち損じ血みどろちんがい、ちんがちんが謂人方へ逃げて行く」。

ちやう　二十餘の若侍茶宇の袴にもぢ肩衣(堀川波鼓)　女が帶の若紫、茶宇の袴の信夫摺(雪女)

〔茶宇〕茶宇織の略。琉球織に似た舶來の絹布で、多くは袴地とする。茶宇の名はその產出地の印度のチヤワル(Chaul)の地名から起つたものである。

***ぢやう**　それはぢやうか有難い(淀鯉)　もしそれが定なれば十兩といふ金唆まる、うまい事であるまいか(大職冠)　あれまたひつしやり鳴き止んだ、どうでも誰ぞあるは定、ちよつと吟味と(鑑樞三)　あのお侍樣、同じ死ぬる道にも十夜の內に死んだ者は、佛になるといひますが定かいな(天網島)

〔定〕きつと。必定。古今著聞集・九に、「例のぢやうにしけるに」と見え、平家物語・卷五、富士川の條に、「賢盛程射候ふ者は八箇國にはいくらも候、大矢と申す定の者の十五束に劣りて引くは候はず」など見えてゐるから、餘程昔から用ゐた語である。現今中國地方で「ぢやうしき」(定式)と云うて一般に用ゐる。

ぢやういん　定印正しく坐し給ひ(魔迎)

〔定印〕入定の相を標する印契。禪定に入るとき手に結ぶ印である。「印」はその條を見よ。

ちやうかう　凡そ繪の道に六つの法あり、長康・張僧・陸探の三人を異朝の三祖と學び來て(反魂香)

〔長康〕顧愷之の字である。晉の興寧頃の畫師で、その描く所六法兼備はり、生動の勢があつたと云ふ。

***ちやうぎん**　丁銀四百目包の通り(重井筒)

〔丁銀〕銀貨の一種である。重量形狀等は鑄造の年代によつて差違あれども、概して四十三匁內外で、海鼠の形をなし、常是などの極印がある。

ちやうくわらう

「飄箑より駒を出すは張果老」を見よ。

***ちやうごふ**　幻や定業の限とは(萬年草)　よし何事も前世のこと、定業と觀ずべし(佐佐木)

〔定業〕苦樂を感受すべき宿世の決定業。「幻や定業の云云」をも見よ。

ぢやうさい　身を粉藥に御奉公、ぢやうさいなしとぞ答へける(薩摩歌)

〔定劑〕藥の名。雍州府志(貞享三年刊)六、土產門上・藥品部に、「定齋藥。豐臣秀吉公在ニ大阪城一時、城下藥店有ニ定齋者一、天性好ニ俳優一、故公被ニ催ニ蔬藥一時定齋作ニ狂言一、曾遊ニ擊將軍沈惟敬一、自ニ大明國一歷ニ朝鮮國一來ニ本朝一時、沈惟敬奉ニ使一盡ニ藥方於秀吉公一、公以ニ斯方一被レ授ニ定齋一、數レ之使ニ爲ニ恒產一、此藥治ニ諸病一、世稱ニ定齋藥一、其孫來ニ洛陽一住ニ東洞院綾小路一、今稱ニ青木屋一」。ここの文は「定齋」に「じようさい」(その條を見よ)をいひかけたのである。

***ちやうさやようさ**　福の神のお迎、ちやうさやようさや千歲樂萬歲樂(壽門松)　眞の氏無うて玉の興、內ではろくな味噌漉さへ無かつた、ちやうさやようさになりやつたか(持統天皇)

山車を挽き又は輿を昇くなどの時の囃言葉である。見た京物語に、「きやりなし、ちようさやようさといふ」。浪花方言に、「ごうさやようさやてうさやようさや。大阪にて山車を挽き歩く時囃子の言葉なり云云」。

ちやうじやせん 急ぎ長者宣を下し、彼を五逆の罪に沈め(三世相)

〔長者宣〕摂政関白が氏の長者として下す御教書をいふ。綸旨院宣を氏の寺社に下されるには、直接に氏の寺社に下されないで、まづ氏の寺社に送附したものである。例として次に記せるは弘安六年四月十四日の長者宣である。傳燈法師位乗弁盛綱等宜令奉仕當年研學竪義者長者宣如此建之謹狀　弘安六年四月十四日治部少輔兼仲奉謹上　勅使弁殿)。「氏の長者」をも見よ。

長沙の罪 自ら長沙の罪を避け、此日本に筑紫湯(國性爺)

漢の文帝の時に賈誼と云ふ賢士があつた。正朔を改め禮樂を興すことを謂うたが、佞人絳灌等に毀れ、出されて長沙王の太傅に貶せられた。この故事によつて流罪の意に云うたのである。

ちやうしゆん 芙蓉、林檎、長春、三白草(振袖始)

〔長春〕薔薇の一種。花は單瓣なるも重瓣なるもあつて四時共に咲く。

***ぢやうじん** 叔父丈人君は五三日御寢ならず(國性爺後日)

〔丈人〕長老の稱。長者。易經・師卦に、「師貞、丈人吉」。

***ちやうすけ** 「お寺の長介」を見よ。諸艷大鑑卷一、花の色替て江戸紫の條に、「東寺の長と見えてあちがぬの土を碎く男に」ともある。

ちやうすなり 出ばなをつけたらばと、茶白形になるを見て(今宮)

〔茶白形〕茶白の形に腰をべつたり据えること。

ちやうそう 凡そ繪の道に六つの法あり、長康・張僧・陸探の三人を異朝の三祖と學び來て(反魂香)

〔張僧〕張僧繇を云ひ、梁時代の人である、天監の初め武陵王國侍郎となる、畫に妙を得、武帝の命によつて寺院の壁に畫いた。曾て安樂寺の四白龍を畫き、點睛したらその畫龍忽ち雲に騰つて去つたといふ。

ちやうだい 白書院・黒書院・納戸・帳臺・化粧の間(用明天皇)　男は寢取られ、寢間帳臺は見さがされ(重井筒)

〔帳臺〕室内に疊座を設け、帳を四方に垂れたもので、貴人の殿所に用ゐる。委しくは雅亮裝束抄などに就いて見よ。またこれと別に、主人の常に寢る所をもいふ。貞丈雜記に、「帳臺は主人常に寢る所にて云云」。

ちやうてう 定朝の御作一寸八分の地藏菩薩をこの家の寶とし(傾城壬生大念佛)

〔定朝〕原本には「ぢうちやう」とあれども、定朝の誤られたものであらう。定朝は後一條天皇頃の佛工である。山城國葛野郡朱雀野村壬生なる壬生寺の本尊の地藏菩薩は、定朝が一刀三禮一千日の根精を盡して作つたものであると云ふ。さればそれに緣ある「定朝の御作一寸八分の地藏菩薩」と云うたものであらう。

***ちやうどころ** 一門衆・町所まで頼んで土藏土藏に封を付け(淀鯉)　町所へも斷なく人の留守に蹈込み、壘まで寶拂ひ(博多)

〔町所〕町會所、即ち町年寄の事務所をいふ。

ちやうはんづきん 長範頭巾しよんぼりと(女腹切)

〔長範頭巾〕九頭巾に鐵の長う垂れたもの。書言字考節用集・服食門に、「張樊頭巾。傳云、熊坂張樊山賊者梟也、擔二任俠貌一張良樊噲之稱一、今所レ制頭巾据二其貌形一者」。

***ちやうほん** 我は卜部熊武と申す山賊の張本(嫗山姥)

〔張本〕主眼の意である。箋解古文眞寶後集、前赤壁賦に、「少焉月出二於東山之上一」とある註に、「前言二淸風一、此言二月出一、一篇張本在レ此」と見えてゐる。轉じて惡漢の首領をいふ。

ちやうまん 水腫脹滿神、申すに及ばぬ鬼の口、とつてもかも瓜山牛蒡(振袖始)

〔脹滿〕腹中に水が溜つて腹の脹れる一種の病氣である。治療法として昔は冬瓜(その條を見よ)山牛蒡(その條を見よ)などを用ゐた。

***ちやうらう** 沙彌が開けば長老が聞く(薩摩歌)

〔長老〕智德秀で又は高德老年の僧侶。禪家の住持を長老と云ふ。祖庭事苑に、「今禪宗住持之者、必呼二長老一」。

ちやうらかす 猫の子が親猫の取つたる鼠をちやうらかして逃すが如く(弘徽殿)　御臺所が姫君のやうに猫ちやうらかしてござつてもすまぬこと(大經師)

侮弄す。「ちやらかす」「ちやかす」「ちょがらかす」「ちょろまかす」などと同類語で、嘲弄を活かしたのが種種にかはつたのであらう。

***張良** あの張良がながれ足、樊噲が門破り(兼好)　張良とやらいひし兵も師匠の杳を取りしぞや(蛙合戰)

張良若年な時に下邳圯上に遊んだ。時に老翁あつて良の所に來て履を落し、良に之を拾へと命じた。良履を取り長跪して老翁に捧げた。老翁足を差出してこれ受けて言ふやう、孺子に教へるものがあるとて、なほ良の忍耐力を試して兵書を授けた。良これより後、漢高祖の師となり、功を立てて留侯に封ぜられた。委しくは史記・留侯世家を見よ。「張良がながれ足」とは、張良長跪して老翁に履を捧げてゐる所をいうたのである。

ぢやうろく 半身丈六達摩の像(聖德太子)

〔丈六〕一丈六尺をいひ、通常化身佛の身長である。坐佛も起立すれば丈一丈六丈に達するものをも丈六の佛といふ。行事鈔・下に、「明了論云、人長八尺、佛則倍レ之丈六」。日本書紀、推古天皇十三年夏四月の條に、「始造二銅繡丈六佛像各一軀」。

***ちやくたう** 一番に馳せ參じ着到に列つて(最明寺殿)　中にも佐佐木入道が息女今日の着到承り(最明寺殿)　はがれを鳴す武夫どもはや道すがら語ひて、今宵これへ集つて着到極め(用明天皇)

〔着到〕出陣以前に諸方から集つた軍勢の名を帳面に書留めるをいふ。軍兵の到著した人名を書く故に着到といふ。謠曲・錄の木に、「一番に馳せ參じ着到につき」。

***ちやくちやく** 一錢持たれど武士のちやくちやく(薩摩歌)

〔嬉嬉〕正統。正眞。正統を兼纔ぐもの。保元物語・新院爲義を召さる條に、「源太がうぶぎぬと膝丸とは嬉嬉に傳ふることなれば」。

ちやこく 枝は木斛我が身はちやこく、うるさき里の勤めぞと(生玉)

〔茶國〕色茶屋の勤め女をいひ、傾城を傾國といふに對して茶國といひ、大阪伏見坂町あたりの遊女をいふ。茶屋者。茶屋女。西鶴與志鑑の茶傾ひぞり顔(寶永五年刊)といふ本がある、その茶傾の茶も茶國をいうたもので、茶國のことが書かれてゐる。巢林子作・卯月淵

色に「新造の振か詰茶か、但は白の白茶か風呂で焚いた煎茶か」、とある茶も色を賣る女をいうたものである。生玉心中のこの文は、木斛と茶國と韻脚を合せた文飾である。

ちやしよ 講中お茶所の冥加錢（二枚繪）

〔茶所〕寺域内に設けて茶を接待する所で、參詣人の休憩所である。ここの文はお茶所を維持する爲に寄進する冥加錢をいふ。

ぢやぢやうま 雜賀屋の聟殿がひん跳れるぢやぢや馬に乘つて、娘御は金物の乘物に乘らつしやる（萬年草）

舅姑御夫婦も乘物やぢやぢや馬と、乘せてもいかな乘らば、こそ（萬年草）

あばれ馬をいふ。俚言集覽に、「ぢやぢや馬。驛馬をいふ、因て唐突離（ぢやぢや）馬と云、もと地蟻（ぢたた）より出でし詞なるべし」。新好色文枕（正德元年刊）卷一に、「とかくきびしき意見の圍所を据え、西島の道を塞ぐといへども、夜な夜なはねまはるぢやぢや馬の耳に風藥、敗毒散を痳病やみにもつた程ものきかず」。

ぢやぢや蹈む 浮かれ浮かされ大將雜兵そそり立ち、馬もぢやぢや蹈む鹿踊（三國志）

ぢだんだ蹈む義。跳廻る（はねまは）。前條を見よ。

ちやのきよのきよひよん この如く形をかへ、ちやのきよのきよひよんで見知らしても、何處ぞが公時臭いやら、盜人どもが寄付かぬ（國八州）

鉢叩の唄拍子である。「鉢叩（はちたたき）」を見よ。

***ちやのこ** 茶ばかりで濟むものか、しん粉のやうな物なりと、茶の子朔の子、のこのこふるまや半七と（女腹切）

もとの母御の十三年忌、茶の子一つ配る事か（薩摩歌）

〔茶子〕椶眸錄に、「今以二早飯前及飯後午前午後補前小食一爲二點心（ちやのこ）一」。日次紀事（黑川道祐撰）二月の條に、「凡京師俗、彼岸中偶逢二親戚之忌日一、則供二茶菓一而祭之、以二其祭餘之菓一互相贈、或謂二親戚朋友一而饗二茶菓一、彼岸中稱二菓子一曰二茶子一」。

ちやひきぐさ 斑女が閨の淋しさは茶引草をも思出し、心細しや絲薄（用明天皇）

〔茶引草〕草の名。雀麥とも云ふ、客無うて閑（ひま）な遊女をお茶挽（ちやひき）といへば、閨の淋しさは茶引草といひつづけたのである。異本洞房語園に、「慶長元和の頃は、蹇蹇の御方も、靠日約束にて何れの日には誰が家、何といふ太夫が手前にて茶の會に參るなどとて、心易き同志は誘引ありしとなり、今に至るまで傾城のお茶をひくといふも此節よりの詞なり」。

〔茶引草〕

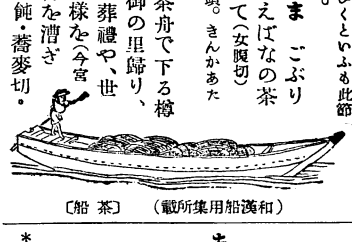
ちやびんあたま ごぶり ごぶりとにえばなの茶瓶頭を振立て（女腹切）

〔茶瓶頭〕瘻鐵頭。きんかあたま。禿頭。

***ちやぶね** 茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里歸り、上荷で送る菲禮や、世の有樣の樣樣を（今宮）

そばに茶舟を漕ざつれて、饂飩・蕎麥切・きりりきりりと押廻し（館樓三）

〔茶舟〕和漢船用集卷五に、「茶船。攝州川荷物運送の舟拾石積なり、又屋形茶舟あり、其名もと茶を煑て賣りし船なる由、遊山舟の名ともすべし、その製海舟作りにして淺川を行く瀨越舟ともすべし、上荷とは製各別なり、或は江戸茶舟と云ふも、名は同じうして製造異也」。



〔船茶〕　（和漢船用集）

***ちやや** 茶屋往きやろが山衆を買やろが（重井筒）

揚屋揚屋茶屋茶屋にて狙ひ求め給へども（加增賀我）

〔茶屋〕ただ茶屋とのみあるは、多くは水茶屋ではなうて色茶屋を言うたものである。

***ちやゆめら** なほ奥深く行先に怪しき數萬の人聲、攻鼓・攻太鼓・喇叭・ちやゆめら・高音をそらし飄飄とこそ聞えけれ（國性爺）

〔從征國記（同治六年刊）所載〕

〔ちやゆめら〕

〔太平籌〕葡萄牙語 Charamela である。木製の樂器で頭と末とは銅で作り、七孔ありて喇叭に似てゐる。唐人笛とも云ふ。

ちやんぎりしつきり 世上にばつと嘯立て言渡したる山鉾の、ちやんぎりしつきり斬つたりや（堀川渡鼓）

京都の祇園祭禮の時山鉾を挽く時の鋼拍子である。錦文流撰、熊谷女編笠（寶永三年刊）卷五、いさぎよきものの條に、「傳右衞門きふじよを刺されて屍居に伏す所を、お虎が附込んで敵の首をちやんぎりしつきりしつきりや」。

***ちゆういん** 母におくれて一七日立つや立たずの其内に御添臥もなり難く、中陰滿てぬ其内は免させ給へとありければ（十二段）

〔中陰〕中陰有の略であつて中有とも云ふ。ちゆううを見よ。

***ちゆううう** この燈籠を六道の中有の明りに迷を晴れ（館樓三）

中有の旅の雲霧に見失ふことありとも（今宮）

情無くも死後れ中有の闇に迷はせし（卯月潤色）

〔中有〕中陰有の略であつて中陰とも云ふ。現世から逝去して來世に生を受ける七七日（即ち四十九日）間をいふ。瑜伽論に、「人死中有身、若未得二生緣一極二七日一住、若有二生緣一卽不定、若極二七日一必死而復生、如二是展轉生死乃至七七日住、自此已後決定得一生」。人間死して中有の間に前世に於ける業力漸次に熟して、その未來世に生じるべき道すがらを「中有の旅」といふ。妄執によつて中有の旅に迷へるを「中有の闇」と云ふ。

***ちゆうぐう** 中宮御平產の御祈り（三世相）

〔中宮〕職原抄別記に、「一條天皇の御世より二人の御妻おはしまして、一方をば皇后といひ一方をば中宮といふ事とはなり ぬ。……されどもいかに濫なる世なりとても皇后と中宮と一時に立て給へる例はなし、女御の中にてすぐれてやんごとなきが、何時しか御子などもも出來ておとなび給へるままに皇后にあがり給へる後、また參り給ふ御方のあるが一の人の姫君などにて、殊にときめき給ふをば女御とのみにてもさしおき難くて中宮とし給ふ。中古の例大かた此の如し」。

***ちゆうげん** 妹の主人の屋敷より中間來つて（堀川渡鼓）

腰掛の中間どもばらりと下つて地に鼻付

け（加増曾我）

〔中間〕侍と小者との間に位してゐる者で、雜兵の一種である。

ちゆうげんぜんのかうたい 浮世を離れし手談のわざ、中間禪の高臺かと、太子を石段に移し參らせ（國性爺）

〔中間禪の高臺〕初禪と二禪との間をいふ。初禪は有尋有伺の天であつて、二禪は無尋無伺の天である、その間にある無尋有伺の禪定を中間禪といふ。梵天王は中間禪をも修されたによつて、梵天王の宮殿を中間禪の高臺と云ふ。平家物語・瀧頂卷、六道の沙汰の條に、「喜見城の勝妙の樂、中間禪の高臺の閣、夢のうちの果報」。

***ちゆうじやうひめ** 中將姫の再誕が蓮の絲で一重羽織おりやるとて見向もする平でない（生玉）

〔中將姫〕右大臣横豐成の女であつて天平十九年二月十八日生れた。十五歳の時禁中で箏を奏して叡感に預り、三位に叙し中將の名を賜はつた。寶龜元年脫俗して當麻寺に入り、善心尼と號し後に妙法と改名した。嘗て彌陀佛・觀世音來られて五色の蓮絲を作られ、姫をして曼荼羅布を織らしめられた。世にこれを蓮の曼荼羅といふ。その殁したのは天應元年。

ちゆうだうじつさう 中道實相の車は無二無三の門に轟き（百日曾我）

〔中道實相〕萬有の實相は本來實有でなく、空にしてまた假有でもない。空にして假有なるが故に非有非無の中道である。この理を說いた一乘の教法を乘物に喩へて「中道實相の車」と云ふ。

ちゆうねんねん中年四年 この遊里一番名の高き山城屋といふくつわへ、中年四年二百兩命がらりに身を賣りて（淀鯉）

「中年」は若年と老年との間の年配である。遊女を勤める年期の契約は十年以内と定められてゐたので、それを勤め終へてなほ後四年の二度の契約をして勤めるを中年四年といふ。

***ちゆうはばおび** 十八九なる女房の袖は鹿子の金絲入、後結びの染帶も内裏にはやる中幅や、中色入れて地白染（天神記）

〔中幅帶〕大幅と小幅との間、通例一尺二三寸幅を帶に仕立てたもので、もと内裏に流行したのが後には町家の娘なども用ゐるやうになつた。西鶴撰好色一代女、卷之一、老女のかくれ家の條にも「天色の昔小袖に八重菊鹿の子紋を散し、大内菱の中幅帶前に結びて」と見えてゐる。

ちゆうほんちゆうしやう中品中生 蓮華開けてやや中品に中生す、さつて中品中生、こそよに有難き大往生の素懷なれ（大原問答）

淨土には上・中・下の品に各また上・中・下の生があり、合せて九品の別がある。（「くほんのじやうせつ」を見よ）。觀無量壽經に、「中品中生者、若有三衆生、若一日一夜、受三持八戒齋、若一日一夜、持二具足戒、威儀無缺、以三此功德、迴向願求生二極樂國、戒香薰修、如レ此行者、命欲レ終時、見二阿彌陀佛與二諸菩薩一圍、放二金色光、持二七寶蓮華、至二行者前一、行者自聞、空中有レ聲讚言、善男子、如レ汝善人、隨二順三世諸佛教一、故、我來迎レ汝、行者自見、坐二蓮華上一、蓮華即合、生二於西方極樂世界、在二寶池中一、經二於七日一、蓮華乃敷、華既敷已、開二目合掌、讚二歎世尊一、聞二法歡喜、得二須陀洹一、經二半劫一已成二阿羅漢一、是名二中品中生者一」。

ちゆうりよ 時に崇禎十七年中呂上旬（國性爺）

〔中呂〕陰曆四月を云ふ。國語に「三間中呂宣中氣也」、とありて註に、「四月曰二中呂一」。禮記・月令に、「孟夏之月、律中二中呂一」。下學集に、「仲呂（ちゆうりよ）四月」。

***ちようでふ** 松風といふ賤しき蜑の色に溺れ、日の御座の御劔を失ひ、罪科重疊によつて勅勘を受け（松風）

御堅固の歸洛重疊千萬（女護島）

〔重疊〕重ね重ねの義。轉じて、至極滿足の意にも云ふ。懸草・貝原好古編に「重疊、宋玉が高唐賦に重疊增益、又翟方進傳に出たり、かさねかさぬる也、俗に物の嘉事を重疊こしなどといへり、それをあしく心得て、重疊をよき事とおもへるは誤也」。

ちようどう 目の重瞳、日に向つて瞬きせず、これ大貴人の相（唐船噺）

〔重瞳〕一眼内に二つのひとみあるを云ふ。史記・項羽本紀の太史公贊に、「吾聞二之周生一、曰舜目蓋重瞳子、又聞項羽亦重瞳子」と見えてゐる。これ等に本づいて重瞳を大貴人の相となす。

***ちようやう** 取分き今日は重陽の折に幸ひ曾我菊や（百日曾我）

〔重陽〕九月九日の節句を云ふ。下學集に、「重陽・九月九日也、月令云、九月九日月與レ日俱應二陽數一、故云二重陽一、此日採二菊獻二觀音一、則壽命長遠也、起二於彭祖古事一也」。

ちよがらかす 大事の金銀を湯水のやうに川遊び、ちよがらかされにや來申さない（女殺）

だましなふる。たぶらかす。愛知縣・丹羽郡地方では現今も「だます」を「ちよんがらかす」といふ。「ちやらかす」を見よ。

***ちよくかん** 松風といふ賤しき蜑の色に溺れ、日の御座の御劔を失ひ、罪科重疊によつて勅勘を受け、京都を立去り行方知れず（松風）

〔勅勘〕勅諚によりて勘當される義。天皇の御しかり。

ちよさい 「じよさい」を見よ。

ちよだう 「にようだう」を見よ。

***ちよつる** 氷の劔逆手に持つて、波舊苔の髭をこそげる、頤ちよつる、中切中刈所まだらに（國性爺後日）

この春早早山崎の與次兵衛めに小鬢先をちよつられた（鑓門松）

ちよつとへつる。僅ばかり削り取る。

ちよのう 戴く桶は千代能が、これも昔の跡とめて、水たまらねば月影も、宿定めずいづくにか（吉岡染）

〔千代能〕千代野とも書いてある、景愛と云ふ尼の初名で、號を無外または無著と云ふ、陸奥大守城泰盛の女で、越後守金澤實時に嫁し、夫の殁後は尼となつて京に抵り、資壽精舍を構へてこれに居つた。或日忽然大悟し、「千代能が戴く桶の底ぬけて、水たまらねば月も宿らず」、といふ和歌を詠じた。委しくは瞞門夜話・上卷に就いて見よ。

ちよびかは 我が見る前ではちよびかはして、ちよつと立てば早どこへ（宵庚申）

ちよこちよこと敏捷に働く樣をいふ。「ちよびしはちよびちよびのちよびで、「かは」は「とつかは」のかはと同じ語であらう。

ちよろい れつそりの牛盜人、ちよろい細工のあめだ牛（關八州）

ぬるつこい。愚鈍な。傾城禁短氣（寶永八年刊）一之卷に、「騷がしい狂言をはじめあかれて暇を取らうとは、そりや前方なる若手の男

にして見せられたがよい筈、此古法師はそんなちよろい手をくふ事にあらず」。現今岐阜縣加茂郡東日河村地方で、「ちよろい」を痴鈍の意にいふ。好色一代女卷一、孕婦の美形の條に「女郎の好く間ぐすりを申せど、そんな事などちよろく見え透き」ともある。

ちらしだいこ　はや今日のお暇と、散太鼓の下とどろき（二枚繪）

〔散太鼓〕興行終る時に打鳴す太鼓、卽ち跳の太鼓のことである。この太鼓によつて客散じるより云ふ。

ちりをひねる　仲秋大きに赤面し、塵を捻つておはせしが（今川了俊）

〔捻塵〕「玉蟲拾ふ」を見よ。

***ちろり**　燗して進じやと、立つて戸棚へ德利からちろりへ移せば（女殺）

〔銚釐〕筒形で、注口及び提梁があつて、酒を煖める金屬製の具。「ちろり」の名は、ちろりと急に煖まるよりの名であるとも云ひ、或は地爐の熱灰中に埋めて煖めるより地爐裏の義であるとも云ふ。

***ぢわう**　地黃に大根しらがまで斯くては果てじと（薩摩歌）拵へは何も入らぬ、お手道具より楠筍より、三百目入の地黃箱五六十も用意なされとの御口上（柁狩）

〔地黃〕多年生草本である。花は黃白色で、葉色を帶びた唇形花冠を有し、總狀花序に排列す。根は强壯藥に用ゐる。地黃と大根または蕪とはさし合で、混食すれば白髮となるといふ。よつて「地黃に大根白髮まで」と云ふたのである。新增大筑波集（寛永二十年刊）に、「くうかいの計の蕪をわけにして、地黃圓をや飲めり養稚」とありて、「ぢわうに大こん蕪さし合なり」と記してある。男も女も地黃を服用すれは精力增進するといひ、支那渡來の藥種である。日本好色名所鑑（元祿五年刊）に「唐むきの女郎色青苦として常に地黃丸をたやさずとかや、此女郎の腹に宿りし子はかはゆや一生大根食ふ事がなるまいと笑へば」。好色赤烏帽子（元祿八年刊）に、「いまだ二十に足らぬ男も、六味八味の地黃丸を用ひて腎水の滿つる事を本とし」。「地黃箱」とあるは、地黃の根を加へてねつた飴を入れた箱である。

〔地黃〕

ちゑのわ　揃羽織の濃柿に智惠の輪の大紋、手振の先供はいはいはい（女殺）

〔智惠の輪〕九つの輪違な模樣。

***ぢん**　愛宕の山にヨエ、ぢんの煙が三筋立つ（女殺）床は伽羅伽羅、ぢんや麝香の薫まで（夕霧）

〔沈〕沈香の略。沈香樹は東ヒマラヤ・アサム等の地に產し、喬木にして百尺に達しる。香料は樹幹枝幹等に脂狀を呈し、暗色に凝結して存在し、その重くして水に沈むものを良品とする。樹によつては香料を有せぬものもある。

ぢんがい　仲秋を追放し積惡猛威の振舞、當家のぢんがい武道の糟糠、相從ふ者どもも時の權とはいひながら（今川了俊）

〔塵芥〕ちりあくたの義。無用の者を賤めていふ。源平盛衰記・卷十四、興福寺返牒の條に、「爰清盛入道者、平氏之糟糠、武家之塵芥也」。

ぢんかうき　「ぢんこふき」を見よ。

***ぢんからり**　又引出してもちんからり、ありたけこたけ引出しても繼切一尺あらばこそ（天網島）

内部に何物も無きをいふ。空虛。西鶴撰・好色三代男・卷之三、友なし男繼を釣るちんの條に、「内證は虛に倉の内はちんからりとなりて」。（序云、西鶴撰・好色一代男・卷四に「小者の一人も見えず、ちんからりに羽釜一つの樂しみ」。同・好色五人女・卷五に、「しづの屋にありしちんからりとやいへる物ひとつに靑き松葉を燒捨て」とある「ちんからり」は焜爐たいふ。この語今も和歌山地方に存して ゐる。雍州府志・土產門下・服器部に、存して「風爐。自三琉球一所來之知牟加羅風爐、是亦珍物也」とある。空虛とは別の語である。巢林子作・開八州繁馬に「げたたましい提灯金棒ちんからりが面白いか」、とある「ちんからり」は金棒を引く音の形容語である。

ぢんこふき　伊勢物語ぢんこふ記、父樣の傍にあるまい（實庚申）

〔塵劫記〕吉田光由の撰で三卷より成り、日本算學書である。初版は寛永四年である。塵劫記は當時盛に用ゐたもので、日本好色名所鑑（元祿五年刊）大阪新町由來の條にも、「塵劫記覺え男め、積りおほせて身の足にはならず云云」と見えてゐる。

***ぢんざ**　やあ藤樣何時からここに御鎭座（淀鯉）

〔鎭座〕神靈の其地に鎭まりましますこと。この文は遊客を冗詞に大盡といふより、大神に通はせて御座るを御鎭座としやれた。

***ぢんず**　いかさまおのれ仔細あるに紛れなし、眞直に白狀すべし、ちんじなば拷問せん（百日曾我）おのれ何者ぞ眞直に申せ、少しも陳ぜば曲事と、聲をあらげいひければ（天智天皇）

〔陳〕陳述する義。轉じて虛僞の申立するを云ふ。

ぢんずゐかう　旃檀・鷄舌・沈水香・丁子香・安息香（釋迦）

〔沈水香〕略して沈香とも云ふ。「ちん」を見よ。

***ちんた**　瑠璃白玉のふらすこにちんた泡盛（酒呑童子）

葡萄牙語 Vinho-tinto（赤酒の義）の略で、往時蘭人によつて舶來した酒の名。

***ちんつ**　行くもちんつ歸るもちんつ、又來る人もちんつちりつて（女殺）やつしは茫左衞門・幸左衞門が思案ごと、四郎三が憂いこと、ちんつちんつちんちりつて（女殺）

口三味線であつて、チンツチンツチンツチリツテチリテツテなどと云ふ。「行くもちんつ云々」はその條を見よ。

***ちんどく**　樣樣の菓子餉酒肴したため、各これに鴆毒を入れ（國性爺）

〔鴆毒〕鴆は毒鳥である。鴆の毒。漢書に「鴆鳥黑身赤目、食蝮蛇野蝎、以其羽畫酒中、飲之立死」。廣雅に、「鴆長七八寸而食蛇、雄名運日、雌名陰諧、以其尾歷食、食則殺人」。

***ちんのざ**　藤原時平公陣の座をつつと立ち（天神記）

〔陣座〕禁中にて公事ある時諸公卿の參著する所である。拾芥抄・中に、「陣座。左近・南殿東、日華門內、右近・月華門內」。禁中名目抄、著陣の註に、「大臣納言拜任之後、始日著二陣座一、陣は軍陣の陣にあらず、參觀の諸官の列座を陣といふ、つらなると云ふ意なり」。

ちんぴ　黑大豆ちんぴ生姜を入れた藥茶でござんす（持統天皇）よしや浮世は陳皮の皮（薩摩歌）

〔陳皮〕熟した柑子の皮を乾して藥用とするも

の。今多く蜜柑の皮を代用する。陳皮の陳は、陳腐の陳と同じく舊りた義。薩摩歌のここの文は、陳皮は藥種として効用殆んどないから、絲瓜の皮と同意にいうためである。

ちんぺい 新田左中將義貞・楠判官正成、陳平・張良が肺肝より出でたる如き名大將（女楠）

〔陳平〕陽武の人で、智謀に富み、漢高祖（沛公）を輔佐して天下を定め、官丞相を經て曲逆侯に封ぜられた。

つ

つ 我もそもじと同船して、斑女が色に氣壓され花蕊に花の色なしと、唐土までもつを引かせん（隅田川）

〔唾〕固唾などいふ唾で、涎の意にいうたのである。「唾を引く」とは、涎の絲を引く、卽ち垂涎する意。

***づ** 「づなし」を見よ。

***ついぢ** 人人はついぢの隈に逃げ給ふ（蟬丸）

〔築地〕「ついひち」（築地）の略。板を心として泥土を塗り、屋根を瓦葺にした垣。和名抄に「築牆」と當ててある。

つい・なんどり 惡い聲付、同じ物の言ひ樣でああ畏つたとついなんどりとお受はならぬ事かはと（會稽）

「つい」は「ちょっと」の意。「なんどり」は「などりの音便、「なごやか」「おだやか」の意。古事記・上に、「今こそはちどりにあらめ、のちはなどりにあらんを」。

***ついまつのうたがるた** 貝おほひは手もつめたし、いざついまつの歌がるたいかがあらんと宣へば（蟻）琴の連彈ついまつの歌かるたも、逢坂山のさねかづら、惡い處へ氣を廻して（椿狩）

「ついまつ」（松明）といふも歌がるたのことである。女重寶記（元祿十五年刊）卷之一、女用繪本花の宴に、「ついまつ。歌がるたの事なり」貞丈雜記・卷八、調度之部に、「歌かるたといふ物は古なし、近代出來たる物なり、本は貝おほひの貝より思ひよりて作りたる故、本名をば歌貝と云ふ也、又伊勢物語に、松明（たいまつの事）の炭にて歌の下句を書きたる事ある故、歌貝も上の句に下の句をとり合するによりて、ついまつとも名付くる也、歌かるたといふは田舍詞也、かるたといふ物の形に似たる故云ふなるべし」。

つう お梅につうを失ひし久米が心ぞ哀れなる（萬年草）

〔通〕通力。「お梅に通を失ひし云云」を見よ。

つうくつ 惣兵衞とつうくつ致し、茨木屋をば私請合ひ（淀鯉）今宵の中に俵屋とつうくつして、せんよを明日から呼取り（酒呑童子）

〔通囲〕こつてりと談合すること。通は心中を通じ合ふこと。「くつ」は「あぢくつ」の條を見よ。現今も中國地方で、情を通じまたは馴合ふを「つうつうする」「つうくつする」という。往往用ゐてゐる。

つうじ 女房傍からつうじして、まだこれはお寢りませぬ（反魂香）

〔通夢〕吃などで意思を通じられぬ者の間にあつて、取次いで話すこと。通辯。

つうづ 女と思ひ怪我するな、並やつうづの女でない（雪女）

通途の字が當ててある。通常。なみ（並）。十人並。念珠略詮、數珠幟職の條に「凡そ念珠に多種あれども、一百八顆を以て通途とす」。和訓栞に「俗に十歳二十歳をつづはたちといへり、文選に十をつづと訓す」と見えてゐる。「つづ」も「つうづ」ももと同じ語で、あらう。（通途の反對を別途といふ。）

通天の冠（つうてんのかんむり）（浦島）

後漢書・輿服志に、「通天冠、高九寸正豎、頂少斜卻、乃直下爲三綴卷梁、前有山展筩」。

〔冠天通〕

通天の紅葉（つうてんのもみぢ） 地名部に就いて見よ。

つかうど 「つこうど」を見よ。

つがない 「つがもない」を見よ。

***つかひばん** 心拍子に乘かけは六番かしら使者番（斑川渡鼓）

〔使者番〕人倫訓蒙圖彙・一に、「使者役は公界に出す第一の面道具なれば、其器量をえらび聰明にして辯舌あざやかにて、禮式を知り文字を知りて片言をいはざるを上とすべし、奏者又同じ」。

***つがもない** ああつがもない、私は大坂者（女腹切）ああつがもない、わしは萬歳に近附はないわいの（大經師）ああつがもない、此葦の葉にどう乘られうぞ（聖德太子）恥も哀れも打明けて、つがなくこぼす正月の、涙も顏に憎からず（壽門松）

「つながりもない」の義。樣も無い。とんでもない。わけもない。本朝俚諺（正德五年刊）に、「つきもなし。俗はつがもなしともいふ、不都合といふごとし」。蟻遊笑覽・卷九に、「つがもなき。箕山大鑑に、わけもなきといふなり」。

***つき** 四筋の町の軒深く、燈火星の如くにて、三五以上の月の顏、さす汐影のわけもよき（壽門松）

〔月〕この文は、十五夜の月に「つきぐわち」をかけて、「三五以上の月」というたのである。「ぐわち」を見よ。

つきかみしも 冷泉造酒之進房平、淺川やうの繼上下かいらぎ作りの長刀、さすが育も小姓あがり（女夫池）

〔繼上下〕上下の一種、德川時代に士人の着用した服で、肩衣に常の袴を用ひ、肩衣と袴との色合地質の相異つたもの。蟻遊笑覽に、「つぎ上下は享保までは、その略服にて、暖氣の時など着用し、冬は決して用ゐざりし、元文の末御役人平日は染上下に不及、つぎ上下小紋縞類取交用候樣、とありてより押並て繼上下著用になりし、天明の今は歷歷も極寒に用らる」。

つきがんな 天の川原に橋ばしらしらげたつるや突鉋、雲をそなたにやり鉋（出世景清）

〔突鉋〕刀幅廣うて兩端に柄をつけ、突出すやうにして木を削る鉋であつて、桶職などの使用するもの。

つきぐさ 月草のなかだちに、顏を見合せ目を合せ（用明天皇）

〔月草〕鴨跖草の古名。

〔さくきつ〕

***つきげ** 太郎鶴毛次郎鶴毛と申して（大磯虎）二十日の月毛の駒の尾